

湯本町のつたや支店で、一行はいよいよ登山の支度に取りかゝる事になつた。毎年の旅行を迎へて、様子を知らずにおかみさんがすばしく働いて呉れる間、即ち一行は、今朝東京からはいて来た靴をぬいで、草鞋にさき代へた。大方の人は、初めてのはき心地さ、新奇を喜ぶ子供らしい表情で、土間の上にふみ試みてゐた。晝食の用意と、簡単な實習機との他、身に一物を帯びず、袴の裾を短くした姿はいかにも輕快に出来上つた。一行は日の中に、淺間山鷹巢山の峰傳ひに、芦の湖畔の箱根町まで辿るべき豫定である。豪雨のはれ上つた後の山間の空の清澄な色も輝く陽の光さを仰ぎみた時、幸福な三日の旅が、一様に一行の胸に閃めかすにゐなかつた。

「鷹巢山登山口。」と認めた木標の立つ所から、N先生を先頭にH先生を殿にした縦隊は、忽ち折れて、雑木の深い細い坂みちに差かゝつた。宿できてきた通り、可成の急坂であつたけれど、弘はむしろその山路をこのんだ。羊腸とした一筋の細道を登り乍ら、先の人からついで々木陰にかくれて行く事だの、杖つく洋傘の先に、落葉が幾枚も幾枚も突さつてくる事だの、非常に興がたつた。ある朽ちた木の株のほゞりには、名も知らぬ様々の茸が簇生してゐたし、殊にも雑木が双方からさしこまつた所は、行く道を暗くしてゐた。ある場所には青い草が柔かさうに生へて、その上に葉を透す太陽のたゞよひが如何に微妙であるかも私は見た。山路の持つ一種の濕り香が行人の渴をもいやす様な冷けさをもつて、嗅覺にしみ込んでくる。私はたまらなく心のそしられるのを覺ゆつ、登つた。密林の帯を越し

しく食を終へた。物を云ふ事は、山陵の閑寂の中に餘りに、突如としてこゝる響であることをお互に知つてゐたから。一行の食事中しきりに駕かき二人が、何かを採集して居ると思つたら、それは「せんぶり」と言ふ植物であつた。H先生の御説明で、その草が腹痛に偉大な効目を持つてゐると知つた。細い白い花びらをつける可憐な植物が、今なほ山路越す駕かき等に、重寶がられる事も面白いと思つた。

其處から頂上迄は、さしても遠路でなかつた。外輪山一帯が可成明瞭に展望される位置に、勃然と一つの亭があつた。登りつめた一行は、互に包み切れぬ歡喜を現はし乍ら、そこに立つて自由に眺望し初めた。此處をさり巻く高い外輪山の斜面には、杉の植林のあとが濃く美しい隈をなし、それが陽を受けて山壁の暗さを、更に大きな複雑な濃淡をつくつて見せた。一行が經て来た淺間山城山は、既に低く貧しく下方に俯瞰され、小田原國府津の町々が明らかに映つた。それよりも遠く遙かに、漂茫と連つた廣りは、相模の海であつた。汀線がいかにもなだらかに走り、それに寄せる波頭が、鮮かな太い一線をなして留つてゐる。一行の口々から、色々な嘆賞の聲が發せられた。願はくは一通り、傾斜風速氣壓氣温を計つての後は芝草山の日たまりに身を投げ出すの休らひを、恣にしたかつた。

併し、其處から蘆の湯迄の道程は、此日の行程の中で私を一番嬉しがらせた。丘陵に似た、なだらかな小山が、幾つも連つて行手に望まれた。一筋の小徑は、起伏から起伏へさくひ乍ら、或は白くあらはれ或は峽に没して見えた。輕くからだに彈性を持たせて、さつさ

た頃には、遙かに緩傾斜な路になつてゐたにもかゝらず、私は漸く身に苦痛を感じ出した。併し、いかにも旅行家風な、練られた歩き方を續けられるN先生に従つて、いさゝかの後れをも取らぬ健脚家の誰彼が、私の傍に在つたので、「一言も苦しい。」とは言へなかつた。その群から外れずに、一所に登つて行く事は、既に大きな骨折であり、やせがまんであつた。心臟が、加速度に高く打つて行き、眞夏にみるやうな汗が、殊に額から流れた。精力の最大限を盡したと思ふ頃、後れた人達を待つ爲に、N先生が五分十分と木陰を見つけては休んで下さるので、私は辛うじて蘇生の思ひをした。立ち止るさ、忽ち覺ゆる山陵の氣の爽かさが須臾に私の苦痛を拭ひ去つた。

毎年の行程の様式を破つて、この路を取つたといふのは、今辿りつ々ある一脈の峰傳ひに、兩側を洗ふ早川と、須雲川との谷を、充分に觀察しようといふ爲である。登るに隨つて、行手の左側に見下される須雲川の谷合が、次第に潤けてきて、其處に點綴された散村の群も、明瞭に指點されてきた。それらのものを見る爲に、一行が立ち止つた時、誰かの口から、正午に間のない事が傳へられた。鷹巢山の頂上まで行くには、正午を餘程過ぎなければならぬと言ふので、畑宿の位置が、最もよく鳥瞰圖式に眺められる細路を選んで席を取つた。此時一行は所々に熊笹の簇生をみるに、過ぎない一面の芝草山にかゝつてゐたのである。食事は乾いた一食のパンにすぎなかつたけれど、皆が満足して空腹を充たすに足る貴い味を持つてゐた。そこらの熊笹の葉、芝草の上を照らす秋の陽の濃かさをしみ通るやうな山上の秋氣の清澄さを私は覺えた。一行はつゝま

さその徑を下りて行く事を、私は無性にうれしかつた。ある起伏を下り盡す時には、身を躍らせて飛び乍ら、少年の様な聲を上げて誇つた。漸く足に親しまれて来た柔かな草鞋の感觸がさういふ時殊に樂しまれた。精神と肉體との、最も健全な快樂から、いつまでも離れたくない事を私は欲して止まなかつた。

上二子の麓に湧出する小さな温泉場―その蘆の湯では、一時間が程紀伊國屋の別館で少憩した。網代風に組んだ柴垣の庭は、いかにも粗末でありながら苔蒸した石の形と、配置丈で面白く眺められた。草鞋はぬがなくて静にお茶を呑み、最中を食へた味もよかつた。堂ヶ島までの一里足らずの道は、既に車馬の性來の自由な、立派な大道であつた。その道を忘れ難い。途中幾つかの自動車と遇つた。疾驅する車上に翻へる、女の美しいヴェール等をも、私は懐しく見た。堂ヶ島では至る所で清水湧き且つ走るのを見た。ある空溜には手を浸してその冷さを知つた。この源泉で、日毎に漱ぎ、沐浴する此處の人達の幸福を、私は羨しく思つた。四辻から通じる道路を辿つて一行は箱根権現の參詣を思ひ立つた。深く暗くわだかまつた杉の森と、苔滑な高い石段との奥にさゝやかに在しますみ社がそれであつた。高く頭上に廣がる老杉の梢をふりさげ見、苔の厚い石の段々をふみ乍ら、私は氣分の正されるのを感じた。

音に聞く杉並木も道を急いで、目ざす箱根の町が黄昏の中に見え出した時は何か嬉しかつた。舊本陣石内旅館―その一棟の茅葺の平家は、疲れた一行の意をどんなに親しく迎へた事だらう。今朝湯本町に付き、四里の山路を踏破して来た一行の草鞋の紐は、其處の

低い支那で解かれた。……大正七年十月八日第一日行程。

文四 せつ 子

吾をせめ吾をなやむるおそろしき、くしき悪魔はわが心なり
ごまりたる時計と吾と剝製の小鳥のほかは何物もなし
不具な子を持ちたる母の心地しておのが心は吾をみつむる
まだ知らぬ清き世界を吾は見き物も覚えて病みてある時
世の中に残り、おのが足跡は小さけれども尊しと思ふ
かろやかに物も云ひ得ぬ子となりぬこのをのゝきにおそはれしより
あるかなき朝の風にもうちふるふ、アスハラカヌとおのが心と
世の中のすべての人が何となく吾がはらからの心地こそすれ
此れもよしあれもまたよし何物も皆よし今日の吾が

しばらくは目をとちてきく天地のなげきより來るこがらしの音

秋 咏

さふらん

旅にしてはや夕ぐれ山々も見つゝつかれて君をこそ思へ
遠旅のころかなしく夕暮のみしらぬ驛にともる火を見つ
今はやみちのく遠くはなれて見しらぬ驛にくれはてにけり
京もはや近づきにけりをち方の空にあかるくはゆるともし火
さら／＼と葉すれかすけくつきよみの光のかげにゆらく穗すゝき
つきよみの光にしるくわくら葉を風にならして立てる木のみゆ
ひる時雨はれにけらしなひさ方の空はほのかに白みそめつも
そろ／＼とたゝなはりつゝ五百重山夜の天のもとにもたしたるかも



心には

いつまでも一つの道をめぐり居る走馬燈見て吾を思ひぬ
みにくさをかさねていとも美しき物を思へるこの女かな
喜びも悲しびも皆わが胸の尊きたから人にもらさじ人間のなす事皆がふつゝかに思はるゝかな此頃の吾おのがみをめでたきものと思ふこと今宵始めて吾は知りけり
初冬の夕日の町を歩みゐる昔の友にふと逢ひにけり
湖
くもしろき大空のかけふか／＼とうつしてすめる山の湖
旅にして一人むかへば湖のとほくひろきも悲しかりけり
山かひの小さき沼に菱とりし乙女のわれはやすかりしかな
ひとり／＼したしき人とはなれゆくかなしみにゐてこがらしをきく

湖

しづ 枝